



自分の花を咲かせよう

第12号
加茂谷中学校通信
R8.3.13発行

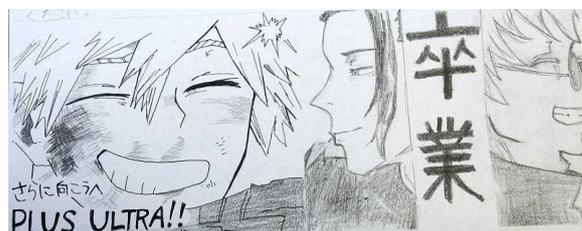
卒業 ～前進～

第79回卒業証書授与式において、11名の卒業生が旅立ちました。
卒業式を前に、生徒会役員が思いを書いた生徒会新聞の内容を紹介します。

もうすぐ卒業式です。三年生の皆さんとお別れするのは、これで2回目です。1回目は、小学校のときでした。毎日見ている6年生が、何だかとてもたくましく見えたのをおぼえています。

僕が小学校の卒業式で一番感動したところは退場です。卒業証書をもっているところでもなく、歌を歌っているところでもなく、退場しているシーンが一番感動しました。なぜなら、一人ひとりが胸を張って堂々と歩いていてとてもかっこよく見えたからです。その堂々さから、今までやりきった自信や、これから中学校に向かっていく覚悟が見えました。目を見ていると、少しさみしそうでしたが、まっすぐ前を見ていて、その先の未来を見ているような目でとても輝いていました。その目を見ると、「本当に行ってしまうんだなあ」と、とても悲しくなりましたが、全力で応援しようと思いました。だから、全力で拍手しました。みんなも全力で拍手をしていました。会場中が拍手に包まれながら6年生たちの、強く前に行く大きな足音が聞こえてきました。僕は、今でも、あの姿を忘れていません。

そして、今年も立派になった3年生の卒業式を絶対成功させます。そのために、歌や式の練習を全力でがんばって、3年生が安心して高校に行けるようになります。高校に行っても、全力で楽しんできてください。



在校生が心をこめて作り上げた式場において、厳粛な式典を挙行することができました。ご参列くださり温かく見守っていただいた皆様、本当にありがとうございました。

堂々と胸を張り卒業証書を受け取る卒業生の姿には、たのもしさが感じられました。卒業生、在校生ともに、この一年を締めくくるようなすばらしい歌声でした。

卒業式での卒業生代表答辞では、11名の仲間一人ひとりへの思いが語られ、「みんなのいいところは、言い尽くせません。素敵なおみんなと、三年間一緒に過ごすことができて、本当に幸せでした。本当にありがとうございます。」と締めくくられました。

在校生の皆さん。学年を越えたつながりが大きい加茂谷中学校を、誇りに思います。中学校の三年間は本当にあっという間です。仲間を大切に、日々の生活を大切に、毎日をご過ごしてください。不安なことや困難なことがあっても、仲間や先生を信じればきっと乗り越えられます。私たちは、いつまでも皆さんのことを応援しています。

地域の皆様。鯉祭りや全町運動会などでは、地域の一員として私たちのことを常に考えてくださいました。また、寒い日も天気の良い日も、通学路に立ち、私たちの安全を守ってください。優しく挨拶をしてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいです。皆様と関わるたびに、加茂谷だからこその強い絆を感じ、加茂谷を誇りに思います。私たちが元気で毎日学校に通えたのは、いつも見守ってくださった地域の皆様のおかげです。本当にありがとうございます。(卒業生代表答辞より)

加茂谷中学校には、寄付して下さる新しい本(古い本にも、読んでほしい本がたくさんあります)がたくさんあります。廊下を歩いていると『なぜ戦争は終わらないのか ぼくがアフガニスタンで見たこと』(1995年発行)という本が目にとまったので読んでいます。みなさんも気になる本を見つけて読んでみませんか。

『なぜ戦争は終わらないのか ぼくがアフガニスタンで見たこと』
小林 豊 ポプラ社 より
．．．いまだに戦争は終わらないばかりか、ますます絶望的な状況だという。

ぼくたちは人間的な“自由な生き方”をめざす。だから、この世の中のすべてのものの絶対化をゆるしてはならない。すなわち、政治、宗教、民族、思想、イデオロギー、そして正義さえも、権威として絶対化しそうなものをゆるしてはならない。

つねに疑問をもって、ふれてみる。なめてみる。うらからものぞいてみる。それでも疑ってみる。そうやって「知る」のだ。

自分自身の批判精神で。

お別れにムータッド氏(当時の副大統領)がいったことを思い出す。「援助もうれしいが、わたしたちには、日本の人たちが、われわれのアフガニスタンという国を知って、いつも関心を持ってみていくくれるのがなによりうれしんですよ」

これが氏の本音だと思った。

だれでも一人では生きていけないし、ぼくたちが人を援助するなどということも、そうかんたんにできることではない。

しかし、その国を知り関心を持ちながらみつづけることはできる。

無関心がおそろしいのだ。

世界はいつも、人間の無関心が、とんでもない悲劇をうんできたのだ。だから、ぼくは思う。

自分の祖国を愛するように、もうひとつ自分の愛する国を持ったらどうだろう。

地図帳をひらいて、たまたま指さした国でもいい。名前が変わっていてもいい。

そうしたらその国のことをしらべてみるのだ。気候、人口、民族、宗教、好きなどところからはじめてみるといい。．．．

日本という国について、もうひとつの好きな国を想う時、きみは、自分の国からだけでは決して知ることのできなかつた、きみ自身の存在を知るだろう。

アフガニスタンにランドセルを送ろう

加茂谷中学校では、NGOジョイセフを通じて、アフガニスタンにランドセルを送る活動を10年以上続けています。日本から届くランドセルは、子どもたちが学校に行くきっかけとなっています。ランドセルを送ることで笑顔がいっぱいになったらなあと思います。

使わないランドセルを持っている方がいましたら、ご協力くださいますよう話を広げていただけたら幸いです。よろしくお願ひします。

(学校ホームページにも掲載)



そう、きみがその国を好きにならなかつたら、その国はきみにとって永遠に存在しなかつたように、きみはその国を知ることによって自分にぎめるのだ。

「どうしてきみは、その国を愛したのだ」

ぼくはきみに問いかける。

．．．

考えてもみてくれ。

日本中の人間が、それぞれ日本のほかにもうひとつ愛する国を持っているなんて、なんとすばらしいんだろう。よるとさわれると自分の愛する国のじまん話をするんだぜ。

これを国際化という。

外国製品を買わされたり、英会話を習うことは国際化とはいわれない。その国のことを、その国の人々のことを、まるで自分のことのように気にかけて——。

こうしてきみの世界は無限大に広がる。

